



平成30年が明けました。皆さんにはいつも「環境の変わり目は意識を変える絶好のチャンス」と話していますが、新年を迎えたという大きな環境の変わり目を是非有効に活かして、各自の目標に向かって邁進してほしいと思います。また、地域の催事に合わせ、ボランティアも含めて行事の多い学期でもあります。それぞれの行事を通して、人との関わりを深めたり、自分自身を成長させたりする良い機会にしてもらいたいと思います。

◇箱根駅伝における「襷」の持つ意味



3学期始業式では、新年恒例の箱根駅伝に関わるエピソードを紹介しました。その中で「『襷』はチームを繋ぐ糸であり学校の名誉と誇り、チームの血と汗と涙が染み込んでいる。」と話しましたが、ちょっと大げさに感じた人もいたようです。そこで、箱根駅伝における襷の持つ意味を少し補足します。

一般の駅伝競走では主催者が襷を用意しますが、箱根駅伝では出場大学がそれぞれ自分たちで用意します。中には、箱根駅伝で使用する襷を昔から保管し、箱根駅伝にしか使わないという伝統を受け継いでいる大学もあるほどです。したがって箱根駅伝の襷は、選手達にとって母校の名誉や歴史を背負った大切なユニフォームの一部ということになります。

設定時間内に繋がれず、「繰り上げスタート」になると、次走者はそれまでの選手の汗が染み込んだ襷をかけることなく、主催者が用意した襷をかけてスタートすることになります。箱根駅伝を完走するという共通の目標に向かって汗と涙を流し、チーム一丸となって母校の伝統を受け継いできた襷を繋ぐことができなくなるのです。また、選手が途中で体調を崩しふらふらして走れなくなったり、中継所直前で倒れたりすることがありますが、監督が手を貸すことはできません。選手に触れた時点で走行を手助けしたと見なされ、棄権扱いになるからです。監督は何とか襷を繋いでくれることを祈るしかないのです。こうした思いや心の葛藤を、選手も観客も共有しているから、襷を繋ぐということに感動するのです。

皆さんにも、「自分から自分に繋ぐ、節目節目の襷をしっかりと繋いでほしい。」と話しました。

◇競技カルタ大会の序歌について

カルタ大会の開会式で、競技百人一首では競技のはじめに「序歌」という、百人一首には入っていない特別な歌が詠まれることを紹介しました。全日本カルタ協会では「難波津の歌」を序歌に定めています。～「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」

この歌は古今和歌集の仮名序に載っていて、第16代仁徳天皇が即位の時、渡来人の王仁博士が梅の花に添えて歌ったとされる歌です。百人一首は、第38代天智天皇の歌が1番になっているので、古今集に出てくる、天智天皇より前の時代の歌として選ばれたと言われています（諸説有り）。

競技かるたでは、詠み方の時間配分がおおよそ決められています。その中で歌の出だしのタイミングは、「前の歌の余韻が終わってから1秒後」と、前の歌が基準になっています。一首目の歌を詠む時に「せーの、」で詠み始めるわけにはいかないの、タイミングをはかるために「一首前の歌」が必要となることから、序歌を置いているようです。

昨日行われたカルタ大会では3年生が貫禄の強さを発揮しましたが、その中で1年B組が3位入賞と頑張りました。特に男子生徒の活躍が印象に残っています。1年生は午後から地域の除雪作業に出かけました。今年は雪が少ないと思っていましたが、それでもかなりの高さまで雪が積もっており、クラス一丸となって協力して除雪に臨む姿は、見ていて清々しいものでした。

始業式でも話したように、これからの3ヶ月は今年度の総仕上げとなる大切な期間です。

3年生は卒業に向けて、また、その後の新しい生活が希望に満ちたスタートとなるように、2年生・1年生は次の学年の助走期間でもあることを忘れずに毎日を送ってください。若く、可能性が無限に広がる皆さんは「明るい未来を手にするために、今やれることをしっかりと頑張る」という生き方を選択してほしいと思います。